

# ◎特集:甦る昭和8年の朝香宮邸

## The Original Style of Prince Asaka Residence, in 1933

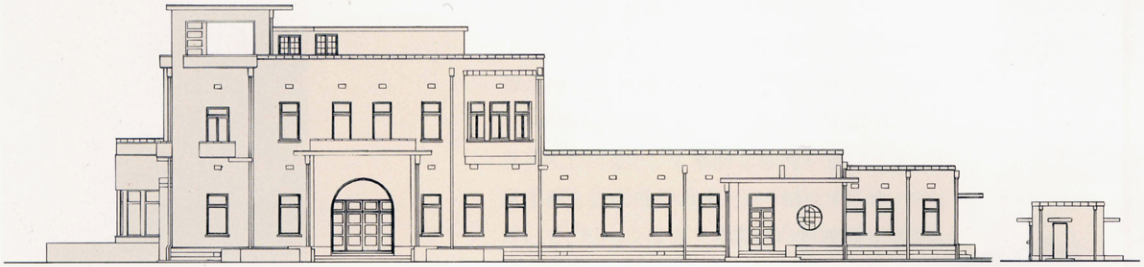


図1. 建築立面図(東面)

庭園美術館の建物は一般に白亜の館として知られています。しかし現在の外壁は、昭和58年(1983年)、美術館開館に際して細かく砕いた花崗岩を吹きつけた、近年の施工です。

本来の朝香宮邸の外壁は、宮内庁に保管されている『朝香宮邸新築工事録』により「リシン仕上げ」であったことが判っています。「リシン仕上げ」とはポルトランドセメントに色砂、着色剤を混ぜたモルタルで上塗りし、十分に硬化しないうちに櫛型の板金、ワイヤブラシなどで表面を掻き落とし粗面とする技法です。1928年頃ドイツから輸入された塗壁材料のリシンを用いて壁面を掻き落としたことに由来した塗壁仕上げです。

美術館として開館して18年が経過したため、今年度、外壁の全面改修の計画がたてられ、それに伴い竣工当時の仕様について調査が行われました。「リシン仕上げ」の工法は工事録に詳しく記されていますが、問題は外壁の「色」でした。竣工当時の写真は全てモノクロで、色を確認することはできません。そこで朝香宮関係者から、お話を伺うことにし、朝香宮邸の外壁はアイ

ヴォーリー色であることが明らかになってきました。さらに調査を進めた結果、オリジナルの壁面が、偶然にも建物の一部に残存していることが確認されました。この部分の既存壁面を剥離すると、関係者の方の記憶のとおり、所々に天然石特有のきらめきを持つ、アイヴォリー色の壁が現れたのです。

このオリジナルの壁片を手掛りに設計は進められ、8月中旬着工、12月末にかけて工事を行うことになりました。施工にあ



図2. 昭和8年当時の外壁のかけら

たっては、近年の左官職人の減少から、技術をもった職人を確保するのも大きな課題となっています。それだけにオリジナルの建築手法を用いて施工する今回の工事は、20世紀の文化財を21世紀に残す、意義あるものとなるでしょう。竣工後は、建物の縁がシャープになり、モダニズム建築の簡潔な造形がより鮮明になります。また、テラコッタ(粗陶器)による窓台も当時の色合いに再現され、上品なアイヴォリー色の外壁との調和も美しいものとなるでしょう。そしてなによりも、朝香宮邸の建築に情熱を注がれた両殿下の、優れた審美眼により完成された往時の朝香宮邸が甦ることに期待したいと思います。(岡部)

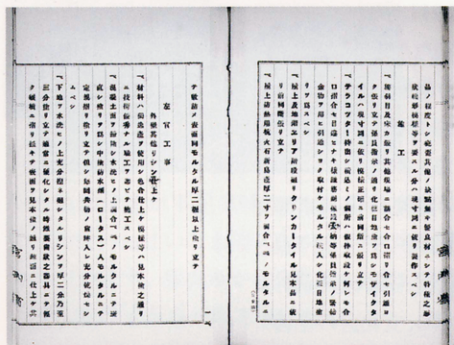


図3

図3.『朝香宮邸新築工事録1』から「左官工事の部」